

最上川水系川漁資料リスト

2004・12現在



池田定二郎 立川町清川 S50年頃
最上川が庄内平野に流れ込むその入り口

立川町の最上川での職業漁師として、
やつめ漁や川蟹（もくずがに）漁を行っ
ていた。

山形新聞の「この道50年」の取材で撮影
されたもので、川船に乗せたドウ(筥)が
河口部のものよりも短い。腰には、鉈を
いつも携行していて、「早瀬では絶対に
錨を使うな。舳先が水中に持っていか
れる。そんな場合に錨綱を切るための
もの」と話している。

若い頃は、漁の場所を神様に伺いをたて、決定していたが、表面的に流れがゆるくて
も、底水の速い場所を「やつめ」の漁場とした。船には必ず補修用にと、人に頼んで採取
してもらった、立谷沢川の河原に生えていた鬼萱（葦）を、十数本積んでいた。

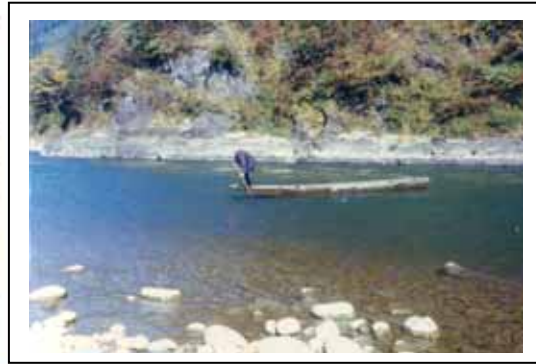
漁が無くなる真冬に、このドウ(筥)を製作したが、入口の形は杉の枝を火で温めながら
曲げて輪に作った。ドウ(筥)の胴を締める箍（たが）の部分は、藤蔓を夏に採取しておき、
川水に浸して柔らかくして使用した。



春先の漁 ドウ(筥)を沈める作業
張った綱にドウ(筥)をいくつも括りつける



秋口の漁
最上川のランドマーク黒岩前で



< 草薙頭首工の取水口前で、牛杵を作って杉葉を縛り付けている。 >

作業の状況からして、農業や治水目的ではなく、何らかの漁業の目的と思われるが、目的が不明。推測すると、取水の勢いを緩くし、鮎の仔魚が遡上する際に取水口へ吸い込まれるのを防ぐ目的とも取れます。最上川右岸にある草薙頭首工の、背後に見られる山も写っています。

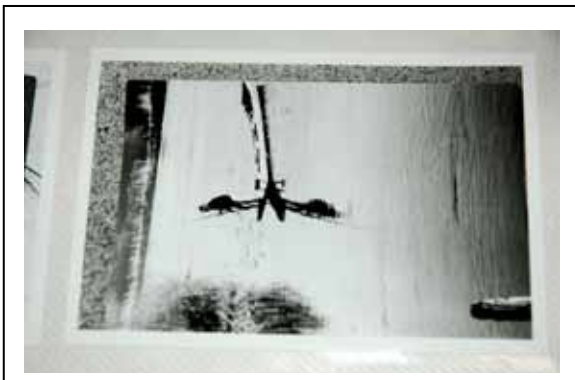


<最上川第二漁業共同組合資料>
昭和11年(申請は昭和9年6月9日)
の、漁業免許証 許可者は農林大臣
(知事専決?)
最上川第二漁協アルバム



最上川支川寒河江川
鮭鱒の瀬引き網漁
最上川第二漁協資料

最上川第二漁協アルバム



芝漬け漁? 鯉、鮭、ウグイ
最上川支川寒河江川
昭和30年代か?
白黒手札判

最上川第二漁協アルバム



最上川の投網漁
カラー四つ切版額入り
最上川第二漁業協同組合事務室



最上川支川寒河江川

鮭(雄)魚拓

平成4年11月16日体長97cm

最上川第二漁協事務室

現在最上川本川での鮭漁は、他の支川での漁に影響するために規制されている。



見張り小屋

鮭漁や築漁の際に河原に作った小屋。築に鮎などが落ちるのを待つ小屋で、鳥に鮎が持ち去られたり、簾の上で死んでしまって生きが下らないよう見張って拾い上げる必要があった。

最上川第二漁協アルバム



溜池の引き網漁

昭和30年代?

白黒ライカ判

獲物は鯉

最上川第一漁協アルバム



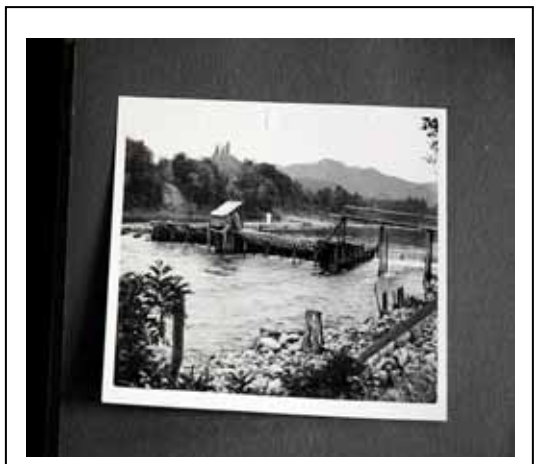
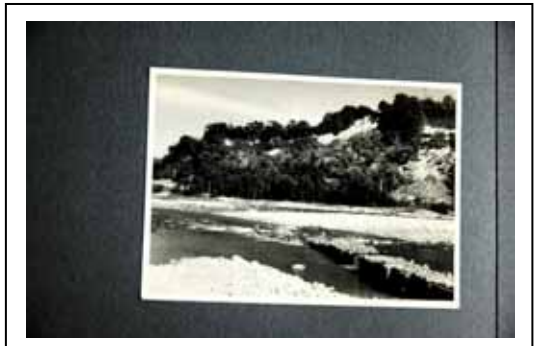
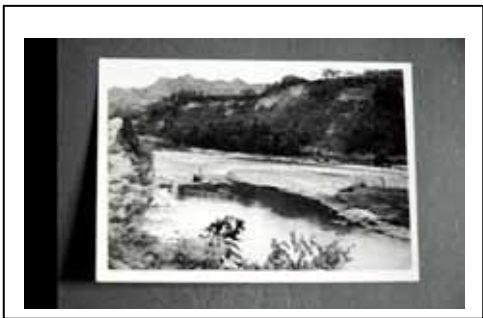
築場写真集

最上川第一漁協アルバム

昭和35年頃に本川ダムである東北

電力「上郷ダム」建設に伴う、築場に対する漁業補償が行われた。

遡上を遮断され漁獲量減になる対象の築場を特定する目的で漁協が撮影したか、補償をした東北電力の提供を受けた写真と思われる





吠（かます）張り漁 最上川第二漁協アルバム 昭和 35 年以前

秋、事前に打っておいた四方の木杭に吠を掛け、人工的に薄暗い越冬場所を作って魚をおびき寄せておき、魚の動きがなくなる冬を待って、刺し網で周囲を囲んで中の魚を捕らえる。

「吠場（かますば）」「かまば」などとも言われていたらしく、禁漁法であったため、取締りの証拠写真として残されたもの。最上川本川で行われたものと思われる。

かまばは、柳を束ねて沈めた「芝漬け漁」の芝も指すが、「カマス場」が語源であろう。



昭和 35 年以前



桜鱒の投網漁 最上川第一漁協アルバム

ヤマメが降海し、再び河川に戻り桜鱒になる。春に遡上して深い清冽な深場で、秋の産卵時期まで居着いているので、格好の魚の対象になる。

ヤマメが数年間産卵を繰り返すのに、桜鱒は、産卵で一生を終える。川の許容量を現しており、海と川との魚類の行き来を保障しなければ、この漁は成立しえない。

山形県では、桜鱒を県の魚に指定し、「魚が上り易い川作り」を、河川を管理する国土交通省、山形県と、内水面漁業協同組合等の手で進められている。

桜鱒は、河川に遡上してからは、餌を獲らないといわれているが、ヤマメの習性を残しており、反射的に獲物を追うために、ルアー釣りの絶好のターゲットになって、最近の若者の憧れともなっている。



最上川支川(当時)赤川新川(赤川放水路)

やつめうなぎの手掴み漁(密漁)

赤川漁協アルバム

やつめが、海から遡上する晩秋に、流れが急な場所で一度休む落差のある場所が格好の漁場となっていた。砂丘を切り開いた放水路は、兩岸の川水に接する部分が根固め護岸であり、河床の砂が流されて深堀をすると砂丘が崩れ落ちる危険があり、これを防ぐための床固めが所々に行われていて、この部分が、魚の遡上の難所になっていた。

この床止め下流のコンクリート護岸に、やつめうなぎが口で吸い付き、体を休める。

やつめうなぎは、浮き袋が無いために体を水中で停止や固定ができないので、口で吸い付いて休息する。

漁師はこれを知っていて、急な床止めの下流の流れがある護岸の浅い部分に鉄筋を刺して板を渡し、緩い流れを作って、ここにやつめ呼び寄せ下流のものから手掴みで獲る。河川工事の猛者は、上半身裸で水の中に入り自分の体で激みを作り、やつめが体に触れるのを掴み上げ、岸の家族に放り上げて捕まえたという。やつめうなぎが休むための石と体を間違えたのか餌と間違えたのかは、聞く事が出来なかった。この写真は、たまたま密漁であったために写真で記録されていた、偶然の記録でもある。

黒いヤッケ姿の男性は、漁協の監視員である。なお、やつめうなぎの産卵後の幼生は、柔らかな湧水のあるような深い新鮮な泥の中にいて、かわやつめに変体するのを待つ。

泥の中にもぐるのは、体を固定しないと泳ぎ

続けなければならず死にいたるためといわれ、このような河床条件が無ければ、やつめうなぎは子孫を残せない。しかし、このような場所の多くは、農業用排水路であるために、

水路の改良などでなくなり、いきおい成魚も少なくなりました。ある日突然鉛筆ぐら
いの幼生が、それまで皮膚に覆われていた目がパッチリ開き、体色も黄土色から銀灰色に
一瞬で変わるのか、見てみたい現象ではある。両岸に湧き水があり、水路の底がぬかるむ
水深が膝下位の場所で足踏みをして、次第にぬかるんで胸まで水位が来たあたりで、よう
やく一匹のシルバーメタリックに変化し始めた幼魚を捕まえた事がある。今はその水路(川、
河川では無い)も三面張りになって、かわやつめの揺り籠が無くなってしまった。



密漁簀立取り漁 最上川第一漁協アルバム
昭和 30 年代 最上川本流？
ライカ判 白黒

簀を河岸の流れに沿って立て、下流にドウ(笠)
を仕掛ける漁法。

趣味で魚を獲って、食料にしていたものだろ
う。しかし、これが違法でなければ、写真は
残らなかったのだろう。



最上川 立川町 清川の鮭「かけぐら漁」
赤川漁協アルバム 白黒名刺判
昭和 40 年以前

最上川本流に下流が開いた八の字型に杭を打
ち、その上流端に船を固定し、上流から下流
に向かって玉網で遡上する鮭をすくい取る漁
で、昭和から平成になるまで行われ
ていた。背景の河岸に国道と堤防が兼用した
盛り土が無く、昭和 40 年以前と年代が推定で
きる。

赤川漁協が、鮭採捕場の視察で撮影したも
の。右岸の松山町柏谷沢付近から撮影したも
ので、防風林の「御殿林」も写っている。
現在は、本川採補調整のためこの漁が行われ
ていない



最上川支川赤川 櫛引町馬渡
四手網による鮭の採捕



最上川支川赤川 桜鱒瀬引き網漁
昭和 35 年頃 カラー 4 切判
赤川漁協事務室に掲額
岡部夏雄グループの漁風景

農業用水取水堰の床止め下流の深みに居る
桜鱒を瀬引き網(100m に及ぶ)で追い込み、手掴みで捕獲する豪快な漁



寒やつめうなぎ漁
酒田市新堀地区

寒やつめ(うなぎ)漁最上川河口部 酒田市新堀地区 山木氏他
最上川が結氷して船が出せなくなるまで漁が行われる。

このシリーズの写真が数枚、昔の饅頭笠をつけた復元写真が二枚ほど見られる。

山木健治氏は、漁協の組合長として活躍していましたが、数年前に他界されているが、往年の漁の風景が、何度か「最上川写真コンクール」などに撮影されて発表されている。

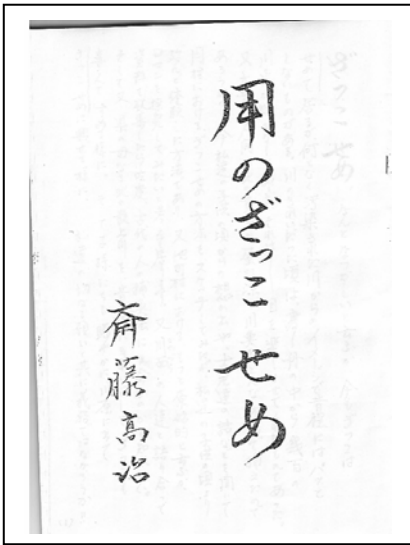
写真の中には、饅頭笠を被った様子がありますが、川に落ちてしまうと普通、笠が水を受けるために、頭のほうから引っぱられ、顔を水上に上げられなくなり、水死する事が多いため、かぶらない慣習である。しかし、酒田では船持ちのシンボルとして、特別な漁師だけが用いていたと古老は伝えている。

酒田市市史編纂質に残されている、大正時代の「鮭大網引き」の写真の中にも、饅頭笠を被ったリーダー格が記録されている。



やつめうなぎ漁

最上川 酒田市新堀 山木健治他



大江町三郷甲周辺の「用地区」に伝わる漁を手書きで纏めた高橋高治氏の作

コピーは、最上川第一漁協から入手



東北歴史民俗資料館発行資料(多賀城市)

東北の鮭展に取り上げられた最上川支川鮭川での鮭漁(最上郡戸沢村)

「かかど」 柳の枝で流速を遅くさせ鮭の遡上道を作って、そこに流し網をかける

「もんぺ網漁」足のふくら脛部分まで膨らんで足首の上で急速に細まる着物の下を纏めるように穿いたもんぺを並べて何本も下げたような網を使い、川を三分の二以上締め切って「ので」を作り、産卵場の下流に仕掛ける。



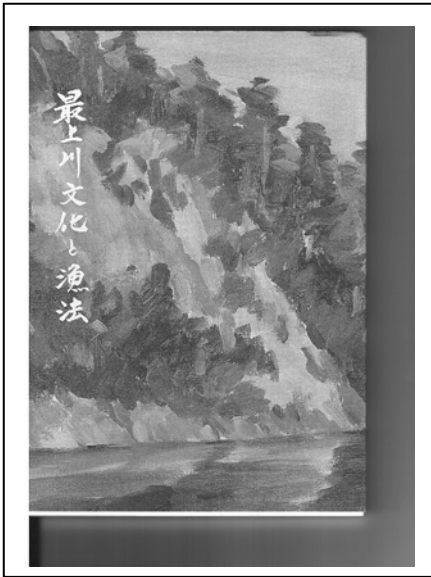
目で見える酒田市史 酒田市市史編纂室

最上川の鮭の大網漁(地引網)の写真がある

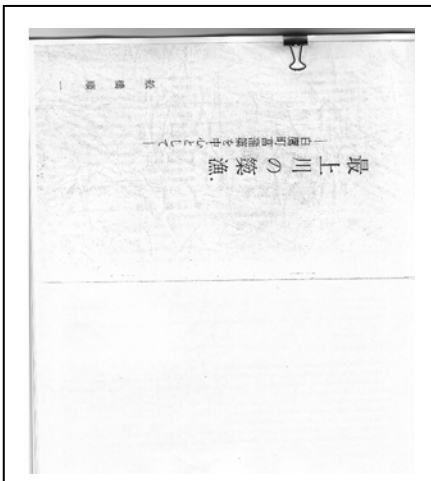
大正時代の鹿路を使って網を引いている組写真のうち2枚がある。(S53/11号)

借用書を出せば貸し出し可能

EL 判白黒



「最上川文化と漁法」 H14 河川整備基金助成
本合海エコロジー(新庄市本合海) 2,000円
27種の漁法を紹介している。挿絵が中心で写
真はほとんど無い。



「最上川の築漁 白鷹町菖蒲築を中心として」
船橋順一 A5-45Pの論文
内水面漁獲高他、築を取り巻く状況が記載されている



「図説・戸沢村の川漁 川の民の知恵と技」
戸沢村企画調整課
平成10年河川整備基金助成
27の漁法や川道具の製作道具を集大成
2版がすでに無くなってしまった。



「ノスタルジア 懐かしの最上川 昭和29年夏」
園部澄の写真集
中に最上川の築場が二箇所収録されている



最上川支川小国川

松原鮎で有名な瀬見温泉の下流で営まれている築漁。

この古い写真に、夏なのに毛糸のセーターの袖を切り落としたものを着て、築漁に従事する姿が記録されている。

ウエットスーツが出回る前の漁師は、この袖なしを自分でセーターの袖を切り落として着用していた。体温が奪われるのを防ぐ工夫がしてあった。足元は、地下足袋に草鞋が普通であった。



最上川支川丹生川の鮭投網漁

昭和55年11月土屋重孝氏(故人)

大石田町総務企画課広報係り提供

丹生川は鮭、桜鱒(かわます)、鮎、瀬つき(うぐい)かじか等の漁が盛んだった。

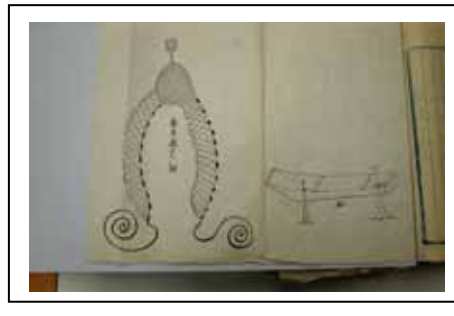
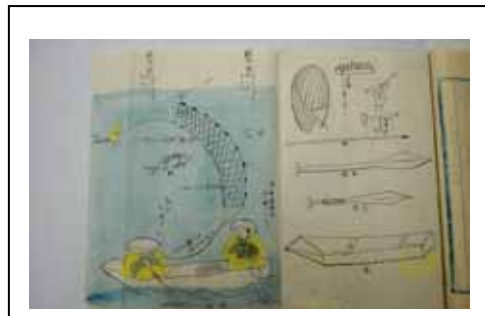
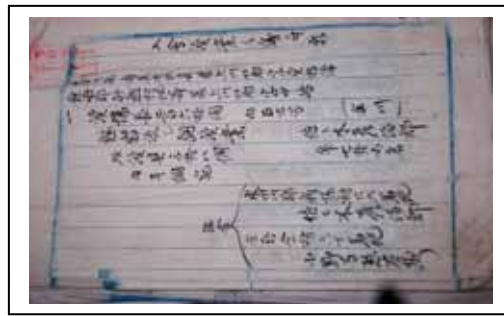
特に瀬つきは、小砂利を掻き均し産卵場所を作り、集まったうぐいを投網漁で捕らえる漁が盛んだったが、写真は探せなかった。現在鮭は、採捕場が作られているため、投網漁は行われない。

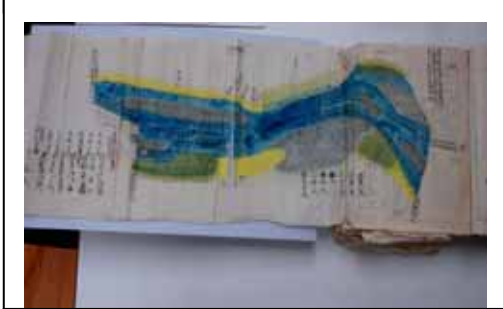


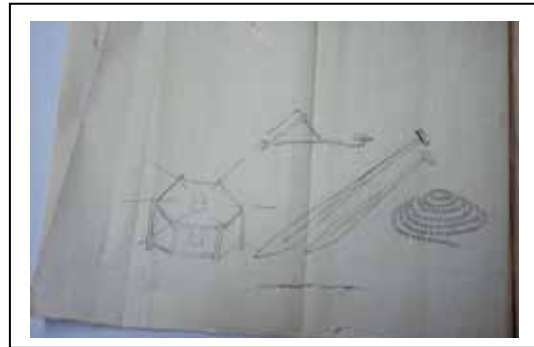
酒田市新堀公民館掲額写真



冬のやつめ漁準備風景 佐藤良氏撮影







酒田市新堀公民館所有の文書の中に、当時の漁法の解説が記載され、各魚場毎に郡役所を通じて知事に申請していた事がわかる。中に漁業法のコピーがあり、当時旧河川法の制定にあわせ、漁業のルールづくりが行われていたことを推定させる。

しかし、この河川における内水面の漁業法が、それまで行われていた漁法を制限することになり、民間伝承の漁法が、規制されていったものと考えられるのも事実であろう。

<かきどうす>

今回探せなかった漁法の写真のうち、雪を利用した漁法がある。

雪が深い手打ちそばの集落、山形県北村山郡大石田町次年子地区には「かきどうす」という漁があった。

最上川の支川富並川を遡り、この集落に入る途中の藁口へ流れ下る溪流が、深い雪に埋もれた頃、青年団の若者が集会場や学校の雪下ろしの際になど、レクリエーションを兼ねて集落全体で行っていた。

2 mを超える雪は、溪流へ流れ出る水の量をスポンジのように吸収し、溪流の水位も下がっている。このために、雪は沢を埋めて真平らになっている場所もあるほどで、魚も溪流も深い眠りについたようである。

この地方独特の木で作った、大きなしゃもじのような「かすぎ」(掻く木?)というスコップで、屈強の若者達が水面に張り出した雪庇を切り落とし、さらに雪を掻き落して溪流を堰きとめてしまう。

すると、ただでさえ水位の下がっていた溪流は、水が抜けてしまい魚が姿を現す。まっていた女、子供老人たちは、この時とばかりに魚を拾い上げる。雪のダムから水が流れ出すまでの短時間が勝負である。

魚の種類は、岩魚、かじか、うぐい、蟹だったという。これを数回繰り返し、獲物を分けるか、夕方から集会場などに集まって、雪下ろしのご苦労目の肴にしたという(森区長談)。

この漁は、山間の水田の中にある溪流がコンクリートで護岸され、集落も過疎の波で三分の一の住人になり、卒業生も働き場所も無いため村を離れて若者が少なくなり、反面、交通の便がよくなり、様々な食料が日常的に手に入るようになると廃れていった。

この漁の成立要因を、当地出身の歌人「海藤(森)忠夫」は、溪流の水が少ないこと、雪が非

常に多いこと、人手が多くあること、魚が多いことを4つの必須条件として挙げている。

「かきどす」の語原には諸説があるが、大類は、雪「掻き(ゆきかき)・落とす」が訛ると、言葉が近くなるので、ここから転訛したものと推定している。

<スガカエ、スガアゲ>

この他に、「スガカエ」「すがあげ」などという漁法もあった。「すが」とは、雪又は氷を意味し、水路に新雪を投入してスノージャムを作って魚の動きを封じてかき回すことで魚を捕らえる方法で、雪が落ちていて晴れた日に、田んぼ周りの用水路の泥を、スコップで雪と共に掻き上げた跡が、あちこちにあったものである。

<ドンジョ堀り>

水路の水が干上がってしまった秋遅くなどは、熊手やスコップで土を掘り返し、ドジョウを捕まえている風習があった。

しかし、水路に家庭雑排水が直接流入するようになった昭和35年頃から、少なくなってしまった。各家々の台所から出る排水は、「へなずり」といわれる菖蒲を護岸代わりに植えた小さな素掘りの水路を通ってから、堰という用水路に入る。その途中に沈殿枘があって、ヘドロも沈殿物も立派な肥料として畑に運ばれて利用され、堰には流れ出さなかった。

しかし、この水路が暗渠やコンクリート水路になって、洗濯機が普及しだす頃になると、ドジョウは臭くて食べられなくなってしまって、よほど人里はなれた水田脇の堰で無ければ、誰も「ドンジョ堀」をする者が居なくなっていた。その堰も、水が流れ易くするため泥が溜まらないコンクリート三面張りに変わり、ドジョウを堀る風習も消えていった。

また、乾田馬耕の掛け声は、耕運機やトラクターの出現で、秋の刈り入れや春の耕運の際に素早く水田が乾燥し固くなることが求められ、堰や水田の用水路から水の流れが数ヶ月消え、次第に魚の数も減少していった。堰の中を群泳する小鮒やオイカワなどの小魚の姿もまれになっていった。

<最近の資料>

東北芸術工科大学東北文化研究センター 最上川文化研究3 2005版

「最上川中流域におけるサケの伝統的漁法 密漁・居繰漁・掻き倉漁 大友 義助

執筆者より抜刷りを提供いただきました。

この資料は、日本三大川漁展(2005年広島県立郷土民俗資料館)の調査資料として公的機関以外に保存されている物を中心に収集した物です。その後、山形河川国道事務所調査課から依頼を受け、資料として公表することにいたしました。これらの資料を収集し、公表することに御協力をいただきました皆様方に、心から御礼申し上げます。また、この調査のきっかけをいただきました、広島県郷土民俗資料館、国土交通省東北地方整備局黒田建政部長、河川部水政課坂本水政課長に心から御礼申し上げます。

2005・5 大類雄一

(自然観察指導員・東北地方防災エキスパート会員等)